

**秋田公立美術工芸短期大学4年制大学化検討有識者委員会
第3回会議 議事概要**

- 1 日 時 平成23年1月28日(金) 13:30~15:40
- 2 会 場 会議兼応接室
- 3 出席者 委員：銭谷委員、河野委員、久世委員、吉村委員、小林委員、立田委員、石山委員（欠席は、渡邊委員、宮田委員、長澤委員）
市側：石井副市長、中川副市長、樋田秋田公立美術工芸短期大学学長、小国企画調整部長、工藤秋田公立美術工芸短期大学事務局長、土田企画調整部次長、須藤秋田公立美術工芸短期大学事務局次長、工藤企画調整課長、古木秋田公立美術工芸短期大学事務局総務課長、北川秋田公立美術工芸短期大学事務局学生課長ほか6名
- 4 主な意見等

(1) 新大学に関する構想について

- 大学院を視野に入れた教育期間を想定すべき。工芸美術の世界は4年間勉強してようやく自分の技量や将来の方向性が見えてくるので。ただし、大学院を設置するのは相応の財政負担が伴うため、県内他大学との連携も併せて検討すべき。
- 教員は常に自身の技術・研究を深めるよう研鑽を積むとともに、地域貢献にはこれまで以上に真摯に取り組むべき。
- 大学からの出口に関するアンケート調査は、きめ細かいものにした方がよい。
- ローカリズムを大事にする姿勢を示していながら、秋田市の伝統、文化、地場産業をどのように認識しているかという説明がない。4~6ページに、1、2行でもよいので、「秋田市はこのようなまち」という文章が必要ではないか。
- 埋蔵文化財や、金工・漆などのものづくりの中に息づいているもの、動態保存ができる資源も含め、再評価、再発掘が必要であり、それらを具体的にいくつか挙げておいた方がよいのでは。他に国公立の美術系大学がないこともあり、秋田は東北の美術・工芸の中核になり得るという見方をすべき。
- 一般教養の教員については、秋田独特の特徴を持つ教養課程を担える者を確保するという方針が有効と考える。
- 秋田市には、伝統工芸など江戸から続く文化の集積がある。埋蔵文化財や生きながら動

態保存されているものも多い。東北の中でも中核になり得る文化を持っているという自負心を持った方がよい。そして、そのような地域だからこそ美術系の大学を作る意味がある、というように実例を挙げながら書き込んだ方がよい。

- 「はじめに」の最初が、このままではつぶれてしまうという言い方で否定的に見える。「美短を改組する」というよりも、「4大を作る。そのために短大を吸収する」という意気込みを表した方がよい。
- 今回の素案では、特色がフラットに見える。新しい大学では何を特色にして、どんなことを売りにして地域に貢献していくのかということを、しっかり作っておく必要がある。美短が元々持っている特色を膨らましていくことも一つ、秋田の特徴をいかしながら個性を出していくことも一つ、グローバルズムを実現するためにどうあるかという発想で考えることも一つである。
- 市民にお金を出してもらって4大化する以上、どのような特色や売りを打ち出して市民の理解を得るかが重要であり、そのイメージをもっと鮮明にする必要がある。
- A4一枚で、大学の必要性、理念、特色、人材育成の考え方がデザインされている図がほしい。文章よりもそういう絵があった方が分かりやすい。
- 例えば、「実験的」「先鋭的」「挑戦的」といった言葉を使って、今までないものを生み出すんだという方針を明らかにすべき。
- 入試のシステムについて、大学の理解と生徒自らの適正の見極めを目的としたセミナーを開催する、いわゆる「グローバルセミナー入試」と言われるような形であれば、生徒が積極的に受験に向かえるのではないか。全国からの注目も集まり競争率が上がることについては、県内・市内の生徒にとってどうなのか心配している。
- 入試については、県内・市内の推薦枠を設けるなど、多様な入口を考えるべき。
- 美術教育センターについては、「地域の」「東北の」という意味合いを込めるべき。初等・中等の芸術教育の現場は、人が足りず疲弊している現状にあるので、地方の中で、独自の路線を持ち各世代の芸術教育に関わる人を養成し、定着させるような役割を担ってほしい。そうした人材の活躍の場を確保することも必要である。
- 外部との連携については、近隣の大学に止まらず、遠くの地方大学、例えば美術系で言えば金沢美術工芸大学とも様々な面で連携は可能。また、例えば、銀行と連携協定を結ぶと全国にギャラリーが確保できるなど、民間企業との連携も有効である。
- 美短では今までもすばらしい教育をしており、県民へのアピール度も高い。その教育内容を、もっと自信を持ってアピールし、売りにしていてもよいし、それが現実的だと思う。一番最初に、「秋田から新しい美術を発信する」「そのためには4年制美術大学が必須である」と強く打ち出すべき。
- 最低限1年半教養科目を受けるなどの目的で駅前キャンパスを作るのは、市民の理解を

得たり、各大学との連携・協力体制を築いたりするうえでポイントではないか。

- 駅前のサテライトは、まちづくりという観点からも必要だと思う。大学の作品が常に見られる環境がまちなかにあったり、大学の学生が常にまちなかにいたりするのはよいこと。コストとの兼ね合いからキャンパスはハードルが高いかもしれないが、身の丈にあったものでも大学の顔をまちなかに作るのは大事なことと考える。
- 今でも一部コンソーシアムあきたで実施している単位互換をダイナミックにすることは、検討に値する。
- 単位互換は県立大学からもお願いしたい。芸術系科目の授業はなかなか受けられるものではないので。ただし、距離の問題があるため、駅前にキャンパスがあればやりやすくなる。
- 市民の目から見ると、市や県の高等教育に対するビジョンが見えていないことが問題だと感じているが、例えば、超高齢社会を逆手にとって生涯学習の分野などで連携を図るといった考え方は、有意義ではないか。
- 大学はまちなかになればというのは持論である。今回はなるべくコストをかけないということで移転は難しいが、空きスペースを利用してサテライト教室を作れば、解決できるのではないか。
- 外部との連携はぜひ進めるべき。美術館や博物館とは言うまでもなく、銀行などの企業とも連携しないと、これからは大学としてもたないだろう。
- 金沢美術工芸大学で行っている市や病院、民間企業等との連携事業、地場特産品の販売戦略提案や商品開発などの社会貢献事業を追い越すくらいの展開を目指してほしい。
- 現在の小中高の図工・美術教育で、以前よりも取り扱う素材が広がってきているような時代にあっては、あえて「ビジュアル」を削って「コミュニケーションデザイン」専攻でもよいのでは。
- 「ものづくりデザイン専攻」には、明確には「工業デザイン」という文言がなく、船舶、飛行機、自動車などのデザインは学べないようなイメージになってしまっているので、工業デザインの要素も書くべき。
- 名称については、独立行政法人化した場合、「公立大学法人秋田公立美術大学」となるが、「国立大学法人横浜国立大学」など、他にも同様に言葉が重なっている大学はいくつもあるので、これでよいのではないか。
- 多くの公立大学法人の財政状況を見てみると、決して無駄にお金を投入する必要はないが、大学を運営する以上、毎年必要なお金はかかるものである。市として必要な財政支出をする覚悟を書かざるを得ないのではないか。
- 大学全体の外部評価は法人にとって必須だと思うが、全く書かれていないので、書いて

ほしい。教員個人の評価も、ぜひとも進めなければ、市民からの共感を得られないのではないか。学生による教員の評価も、今やどの大学でも実施しており、避けて通れないと思う。また、コミュニティサービスを大学自体や教員個人がどれだけ行っているかという評価も必要である。

- 短大と4大では教員に求められる質が違うので、厳格な選考と評価を実施する旨を記述した方がよいのではないか。少なくとも大学設置審議会の審査を通らない教員では困る。
- 本日の議論を整理すると、4年制大学としての特色や売りを明確にすべきであり、その内容としては、一つ目には、「秋田市の伝統、文化、地域の特徴、よさを大学教育の中にかさねる」、2つ目には「美短のよい点をいかしながら、他にはない、従来型の美術教育ではない挑戦的な美術系大学を作る」、3つ目には、「グローバルな人材を育てる教育を行う」、最後に「県内の秋大、県大、教養大、美術館、企業、初等中等教育、社会教育との連携・協力をキーワードにする」ということがある。そして、「これらの特色を持つ4年制美術系大学、秋田・東北にとってもよいことである」という言い方をするのがよいのではないか、ということである。

(2) その他

※ 意見なし。